



Title	江戸時代から現代において人形師はどんな等身大人形を作ったのか
Author(s)	川井, ゆう
Citation	デザイン理論. 1999, 38, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53085">https://doi.org/10.18910/53085</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 江戸時代から現代において人形師はどんな等身大人形を作ったのか

川井 ゆ う

京都芸術短期大学（非常勤講師）

キーワード  
見世物  
等身大人形師  
人体模型  
近代化  
マネキン

はじめに

1. 江戸時代の「見世物」
  2. 「見世物」のイメージの変化と近代
  3. その後の等身大人形
- おわりに

## はじめに

かつて「芸術」と「技術」は同じ意味であった。ARTとは「手わざ」が本来の意味である。現代では芸術史と技術史は個別に語られることが多い。本稿ではそれらが混沌としていた時代の一つの例について考えたい。

「見世物」という言葉がある。『広辞苑』第五版（1998）には「珍しい物・曲芸・奇術などを見せる興行。人の目にさらされ、面白がられること。恥さらし」とある。そしてそこには、なにかしら「うしろめたさ」がつきまとう。「見てはならない物」が存在し、見に行くのははばかれる。そんな雰囲気がある。『広辞苑』の定義を拡大解釈すれば「恥を見せる」ことにもなるのである。少なくとも筆者には当初そのようなイメージがあった。

筆者の研究は菊人形の調査から始まっている。江戸時代末期に登場し、明治時代には「見世物」興行の主力であった。現代も見ることができる。歴史を調べると、菊人形を製作する「人形師」は他の人形も製作しているという事実があり、「等身大人形」全般を調査対象にした。したがって、「芸術作品」ではなく、「仏像」でもない。「見せて」お金をとる目的で作られた「興行」のための等身大人形である、という前提をたてた。

1980年代以降「生人形」が注目されたことがある。江戸時代末期から明治時代の終わりに登場した等身大人形の見世物である。「生人形師」の中には菊人形を製作した人もいる。現代

ではこの語彙は使われないが、まるで人間のような造形に、現代にはないリアリズムが感じられ、小さなブームとなった。筆者を含む現代の人々は「レトロなもの」として受け入れた。

そこで、「見世物」にはさらに別のイメージが抱かれる。江戸時代の娯楽であるために、あたかも伝統的な技を「伝承した」というイメージである。つまり等身大人形の製作技術は「古き伝統技術」であると人々は思う。それは歌舞伎で何代目の俳優というように、連綿と技が受け継がれているという認識である。「見世物」にはこのようなイメージをもたれる可能性が高い。

筆者もこのイメージを抱いていた。しかし、「人形師」へ聞き取りを行ううち、「見世物」とは自分の考えていたものとは異なるのではないかという思いが強くなった。

その思いは、例えば以下の事実から起こった。

- ① 人形師に流派はなく、時代に応じて製作する。
- ② 人形師はファッションをリードする「陳列人形（今でいうマネキン）」を製作した。
- ③ 人形師の中には、その後「作家」となった人がいる。
- ④ 人形師の中には奉納細工の製作にも関わっている人がいる。

以上の事実がわかった時点で筆者のたてた前提は意味をなさなくなった。人形師は芸術にも「信仰」にも関わっていたのだ。「伝承技術」だと思っていたら、新しいファッションの普及に一役かっていた。時代の動きに対応して製作している。つまりこれまでに持っていた「見世物」のイメージが実際とはかけはなれているようなのである。

これらのことを明らかにするためには、上記の事実を検討してみる必要がある。「見世物」はそもそもどのような役割をもっていたのか。現代の人々がもつイメージの「ズレ」はどのようにして生まれたのか。人形師は実際に何を作り、何が求められていたのか。

本稿は、江戸時代から現代まで、人形師が何を作ったのかに注目しながら、1章では「見世物」という「場」の、これまで見過ごされてきた役割を明らかにし、2章では現代の人々がなぜ「うしろめたさ」のイメージをもつのかを、日本の近代化という動きの中で考え、そして3章ではそれ以降の等身大人形について記述しようと思う。芸術史や技術史と言った分割された領域内での考察ではなく、本稿では「等身大人形」という「モノ」から時代を見直してみたい。

なお、本稿でいう「人形師」とは「一般的な」人形を作る人をさすのではなく、特に菊人形やせともの人形という「等身大人形」を製作する職人を意味している。

## 1. 江戸時代の「見世物」

「見世物」研究の第一人者である朝倉無聲によれば、見世物とは、寺社の開帳や縁日など人の多く集まる場所に興行主が仮設の小屋掛けをして、芸能や珍奇なものを見せて木戸銭をとっ

たものをいう。技術・天然奇物・細工物の三種類に分類されている。等身大人形は細工物に属する。本章では、人形師の製作と見られる「細工物」を中心に、現代には見られない当時の「見世物」のあり方を端的に示すと思われる例を挙げて記述する。

### 1-1. 胎内十月

1777（安永6）年、平賀源内は『放屁論後編』の中で、この頃江戸で評判となった見世物の一つとして「胎内十月」を挙げている。古河三樹によるとその形状は、「妊娠十ヶ月の変化の形態を巧みな細工で表現したもので、懐胎女の腹内を開き、十月十日の腹の子の生長ぶりを見せ」たものだという。これ以後「胎内十月」は、消えることなく続いていく。

ところで1773（安永2）年に『解体約図』が、翌年には『解体新書』が出版されている。『解体新書』は、日本ではまだ数の少ないオランダ語の翻訳書だった。重要なのは、これまでに信じられてきた中国式の五臓六腑説が誤りであること、そして人体内部の構造について、全く異なる理解が得られたことにある。腑分け（人体解剖のこと）そのものは1754（宝暦4）年に山脇東洋によってすでに行われている。1759（宝暦9）年に『蔵志』を記して中国由来の五臓六腑説が誤りであることを主張した。しかし『蔵志』での解剖所見はわずかであった<sup>9)</sup>。したがって、『解体新書』以前はまだ中国風に倣うしかない状態だった。

こういう状況での「胎内十月」だったのである。欧米からの新しい知識が「見世物」という「場」で披露されたのである。

浮世絵は、今で言うファッション雑誌、カレンダー、三面記事と様々な役割を果たしていた。その浮世絵もやはり時代を「取り込んで」『解体新書』を浮世絵に表す。その一つが、1822（文政5）年から1838（天保9）年に出された溪斎英泉の浮世絵である。そこには「倣解体新書写」の文字が見える<sup>2)</sup>。しかし当時の「情報の先取り」は「見世物」の方が圧倒的に早い。

現代なら、情報はメディアによっていち早く伝達される。しかしこの当時はまだ新聞やテレビはなく、その代わりに「見世物」や「浮世絵」が機能していたと考えることができるだろう。

### 1-2. エレキテル

1776（安永5）年、平賀源内がエレキテル（摩擦起電機）を完成させた。既述の『放屁論後編』に、エレキテルを見世物に出すと大金が手に入るといってしきりにすすめられたと書かれている。話題になるものならすぐにでも取り込もうとした、もしくは取り込める状況にあったという当時の見世物のあり方を示しているといえるだろう。

しかし源内はもったいないので見世物にしなかった。興行主はあきらめなかった。源内が見世物にするのを拒絶したという話は大坂へ誇張されてうわさとなり、そこで大坂の人形師である大江宇兵衛に依頼して、エレキテルを作らせたのである。1779（安永8）年に難波新地で見世物となった。精巧をきわめていたらしく、オランダ人も評価した。

大江宇兵衛は1824（文政7）年に巨大な銅人形を製作した。裸人形に内臓や筋肉、骨格の形状や位置を詳しく表し、さらに鍼灸を施す箇所を描いた。西洋医学と漢方の合体である。大評判となり、「銅人形」は謎かけにも登場するほどだった。大江は屋号を「津の国屋」といい、「大江」や「津の国屋」という冠詞が人を引きつけるようになった。

大江「忠」兵衛は奉納細工も作った。大阪横堀町の「せとものまつり」に奉納される「せともの細工」が俳優の似顔や美人の顔をつけた「せともの人形」となり、その製作に携わったのである<sup>9)</sup>。管見では1856（安政3）年から製作に従事している<sup>9)</sup>。

### 1-3. 身投げ三人娘と俳優の自殺

1848（嘉永1）年、高輪泉岳寺境内で身投げ三人娘の見世物が出た。前年に江戸市中に起こった水死事件で、女友達だった、よね、ちか、ひさの二十歳前の三人が互いに細帯で身体をつなぎ、大川に身投げした。それぞれに情夫があり、親に無断で遊び歩いたのを厳しく叱られ、悲観しての行動だった。その様子を人形師泉目吉が変死人形として再現した。ホンモノの鳥が死体の肉をついばむという光景さえ演出し、連日満員であった。化物細工は1836（天保7）年頃から見世物になっている。歌舞伎において、幽霊や妖怪の狂言が大当たりしたことに端を発している。「身投げ三人娘」はそのような流行のあった頃に実際に起こった事件だった。

1855（安政2）年浅草奥山に八代目市川団十郎の見世物が登場した。前年の自殺による死を悼み、肖像や楽屋の様子から極楽へ至り成仏する様子までが人形師によって細工された<sup>9)</sup>。

### 1-4. 生人形師、松本喜三郎と安本亀八

1854（嘉永7）年、大阪難波新地で「鎮西八郎嶋廻り生人形細工」という等身大人形が見世物になった。「生人形」という呼称の始まりである。松本喜三郎と安本善蔵との合作である。翌年の浅草興行を見物した斎藤月岑は『武江年表』に「男女とも活ける人に向ふが如し」と記した。高村光雲は『光雲懐古談』に「その評判なことは湯や髪結床のやうな人の集る所で、此人形の噂の無い所は無い」と言い、この評判がもとで、その後しばらくの間どの人形師が作ったものでも「生人形」と呼ばれる。喜三郎と安本亀八（善蔵の息子）が有名になった。

松本喜三郎は、1867（慶応3）年、歌舞伎の女形、三世沢村田之助のために義足を作るよう依頼される。田之助は米国人医師のヘボンに治療を依頼し、義足をアメリカに発注して届くまでの間、松本喜三郎の義足で間に合わせようとしたのである。

すでに17世紀の半ばに一組の鉄製の義足を江戸の大目付井上筑後守政重がオランダに注文してはいるが、日本では当時ほんの一握りの人がオランダ語の図版で目にした程度で、実際の義足を見た人はほとんどいない状況だった<sup>9)</sup>。松本喜三郎は考え抜いた末、竹で編んだ物を作った。しかし職人氣質の彼は、できを恥じて高額だったその代金を受け取らなかったという。

## 1-5. 見世物の姿

本章では、人形師の作った「モノ」を中心にして、現代には見られない見世物を記述した。人々はただ好奇心で見物に行っただけかもしれない。人形師はただ依頼されるままに製作しただけかもしれない。しかし等身大人形は医学・科学・三面記事・ゴシップなどの新しい情報や知識を伝える場〈見世物〉に利用された。一方、寺社の開帳や縁日などで興行をうった起源を受け継ぎ、宗教的事例も見せている。人形師は実に様々なものを製作している。

現代では医学は医学者が、科学は科学者が、三面記事なら記者がその分野の情報や知識を伝える。しかしそれらが独立した分野として確立する以前、「見世物」が分野にかかわらずそれらの役割を担っていたのだと考えることができよう。

だからこそ、「一介の」人形師が、義足の依頼を受けるのであり、奉納細工製作にもお呼びがかかるのである。見世物をただ「珍しい物・曲芸・奇術などを見せる興行」とだけ理解しては、上記の事実を解釈できない。

## 2. 「見世物」のイメージの変化と近代

朝倉は、「見世物」が活動写真の全盛に圧倒され、やがて徐々に消えていくというストーリーを採用している。しかしかつて欧米の知識は前述の「胎内十月」や「銅人形」のように「見世物」という「場」で披露されていたはずである。なのになぜ、活動写真は「見世物」と呼ばれないのか。等身大人形ではないが、欧米から伝えられた写真は、1862（文久2）年に写真絵額として見世物という「場」で披露されているのである<sup>7)</sup>。

仮に活動写真が見世物を圧倒したのだとしよう。それならば現代、なぜ「見世物」に対して「うしろめたさ」のイメージがあるのか。

本章では、「見世物」を見に行く人に「うしろめたさ」を植え付けた理由を、日本の「近代化」という動きの中でとらえてみたい。そしてその中で人形師が何を作ったのかに注目する。

### 2-1. 近代建築の登場——「コレラ」

伝染病であるコレラは感染すると高熱・吐瀉・下痢を繰り返かえし、やがて脱水症状となって、死にいたる。他の伝染病と異なり、感染から死亡までの期間がきわめて短く「三日コロリ」の別称があった。死亡率も非常に高い。そのため、感染者が出ると、家族までが隔離された。

コレラは1822（文政5）年、オランダ商船が長崎に入ったことによって初めて日本に起こった。二度目の大流行はペリー艦隊がもちこんだ。1858（安政5）年のことだ。治療法も見いだされていなかった当時、犠牲者は数万人に及んだ。明治に入ると、西南戦争の帰還兵が全国にコレラを蔓延させ、その後も犠牲者は跡を絶たなかった<sup>8)</sup>。

日本では古くから「養生書」が出回り、民間治療が普及していた。現代とは異なり、神仏に

祈ったり、様々なものを煎じて飲んだりすることもあった。「非科学的」に映るところもある。しかし現代でも通用する治療も行っていた。根本的には、不潔を避け、環境と人体を健全に保つべきであるという現代と同じ姿勢は当時からあった。

ところが、コレラは19世紀後半に世界的に大流行する。日本は自分たちの築き上げた治療法が通用しない現実を目の当たりにする。開国を迫られる日本は、一方で欧米の文化と接する機会をもつ。幕末に欧米を訪れた日本人は、日本とはまったく異なる文化に出会うが、欧米の下水道システムや、都市装置としての堅牢な「近代建築」との出会いが本節では重要である。

日本は欧米の「先進国」に比肩する国づくりを目指す。「養生書」のような民間レベルではなく、国家レベルでコレラなどの伝染病を防止することが急務であった。

1872 (M5) 年、東京に違式註違条例が出される。日本で最初の体系的な軽犯罪取締法令である。「願ナク床店、葦簀張等ヲ取建ル者」は罰せられる。仮設小屋の禁止である。その効果は例えば東京では、「川添ひの水茶屋の内引払ひ仰せ付けられ、「高輪河岸に在りし葦簀張茶店、其の外残らず御取払」いになった<sup>9)</sup>。「見世物小屋」も「仮設」だから規制を受ける。

仮設小屋を規制する動きというのは、違式註違条例だけではない。各府県の「衛生」課も行っている。コレラ予防のために仮設小屋を廃止せよという指導である。

たとえば、1886 (M19) 年に大阪府の衛生課が出した取り締まりに次のような一文がある。

…劇場の構造等にも改良を及ぼさんとする今日…衛生上害無きよう空気の流通を善くせしめ…従来 of 如き粗末なるものを建させず稍念の入りたる構造とし…悪疫流行の時に方り消毒室隔離室等を設けるにも場中の困難を極めず…大なる便利あるべし斯る構造に改良したらんには自然中等以上の観客も来り外国人も来観するようなるや必然なる…<sup>10)</sup>

それが正しいかどうかは別にして、国家は「見世物小屋」のような「仮設」の建物に対し、「不潔」であり、「不衛生」であるという判断をくだした。欧米の堅牢な建築物を「衛生的」「近代的」であるとした。そうして「外国人も来観するよう」に努めたのだ。

## 2-2. 近代思想の啓蒙 — 「博覧会」

1867 (慶応3) 年、日本は幕府からパリ万国博覧会に初めて参加した。それに対応して、「博覧会」という語彙をつくりあげた<sup>11)</sup>。

欧米の「先進国」に比肩する国づくりの第一歩は「模倣」にあった。欧米から戻った日本人は街を歩く人に裸体の人々がまったく見えなかったことを報告する。逆に日本を訪れた欧米人は日本人の肌の露出に驚いている<sup>12)</sup>。日本は国外の万博で「恥をかかないように」努力するとともに、国内でも欧米人に「笑われないように」する必要があった。

1871 (M4) 年に東京府から「裸体の禁止」が出され、翌年には既述の東京違式註違条例でも「裸体又ハ袒裼シ、或ハ股脛ヲ露ハシ醜体ヲナス者」が処罰の対象となった。1876 (M9)

年の『東京府統計表』によると、処罰された10960人のうち2091人でもっとも多い<sup>13)</sup>。当時は裸体姿の人がそれほど多かったということだが、逆にそれほど取り締まりに力を入れていたのだということでもある。裸で街を歩くことが不衛生であるとか、不健康であるという理由が見あたらない以上、これは明らかに欧米の風俗の模倣である。

これは見世物にも影響を与える。1868 (M1) 年、性描写が禁止される。1870 (M3) 年には贗造物を出すことも禁止された。違式註違条例では「男女相撲並蛇遣と其他醜態ヲ見世物ニ出ス者」を処罰する。1873 (M6) 年には不具者が「醜態ケ間敷見世物」として禁止される<sup>14)</sup>。

加藤秀俊は、『見世物からテレビへ』の中で、見世物は、「道徳性と娯楽性が渾然一体となって融合している」という。「コビト・せむし・ロクロ首」などの奇形を見せ、変死人形を見せる。「親の因果が子にむくい、哀れなるのはこの子でござい…」という有名な口上の文句も、視聴覚的に有効に認識させ、人間行為の善悪のメドを与えたのだと説いている。日本人には100パーセントの娯楽の成立は困難だそうだ。どこかに少しでも道徳的ないし教育的なファクターが含まれていないとヒットにつながらない。

「醜態」を見せる日本。しかしそれには日本独自の理由があった。しかし、それらは欧米人の目には「不適當」と判断し、当局は禁止した。

ところが1872 (M5) 年、大学東校 (東京大学の前身) より松本喜三郎に人体模型の製作依頼がくる。医学の教授用に人体組織の模型が必要だが技術者がいない。松本喜三郎に人体模型の見取り図が渡された。人体解剖に立ち会わされる。そうして松本喜三郎製作の人体模型は人体そのままの着色にできあがり、大学東校の教授から「百物天真創業工」の讃称が与えられた。

見世物では「贗造物」が禁止されていたはずである。人形師が作った人体模型は明らかに贗造物である。しかも「裸体」でさえある。これは禁止の対象ではないか。しかし「欧米の医学」を学ぶのに役立つならよいのである。

そればかりではない。松本喜三郎はさらに政府に依頼され、造り鼻と人体模型を製作する。それらは1873 (M6) 年のウィーン万博へ出品された。

1877 (M10) 年、日本で最初に行われた内国勸業博覧会では、人体模型や胎児の成長過程の模型、つまり「胎内十月」が出品された。博覧会の前身である「物産会」でも展示された。

1887 (M20) 年、東京で「衛生参考品展覧会」が行われた。「衛生思想」を普及させようとする「衛生博覧会 (展覧会)」がこれ以降全国各地で行われる。衛生博覧会では大正時代に入ると、「胎内十月」や「人体模型」が人を集めた。主催団体は様々だったが、展示品のほとんどが人形で再現されたのが、警察主催のものだった。「女性と痴漢」、「強姦殺人現場」、「秘部をあらわにした性病の女性人形」、「出産のシーンの女体模型」なども人形で作られた<sup>15)</sup>。

裸体の禁止、性描写の禁止、贗造物の禁止という条例は、見世物業界にとって有効であった。

しかし欧米が起源である博覧会の展示品なら、つまり「近代思想を啓蒙する」という「大義名分」さえあれば条例の強制力は皆無に等しかった。

### 2-3. 近代文化の普及 — 「美術館」

日本はウィーン万博に政府として初めて公式参加した。そのとき FINE ART を「美術」と訳した。「美術」という語彙の始まりである。「美術」とは日本に土着の概念ではなく、博覧会出品のために余儀なく翻訳した語彙の一つだった。「美術館」が現れるのは1877 (M10) 年の第一回内国勸業博覧会に開設されたものまで待たなければならない<sup>16)</sup>。

一方見世物はまだ廃れてはいなかった。1875 (M8) 年4月9日の『東京日日新聞』に人形師、中谷豊古のことが書かれている。大阪南地で見せた等身大人形は、動く五臓機関人形で、松本喜三郎や安本亀八を上回るできだという。

豊古が、1877 (M10) 年、大阪彫像会の会員になった。「美術」は誕生したものの、まだ「作家」の少ないこの時期にあって、見世物で活躍する人形師が抜擢されたのである。彼の門人の二人も1911 (M44) 年に開催された第三回日本彫刻絵画展に出品している<sup>17)</sup>。

事実はこれだけにとどまらない。石井研堂の『明治事物起原』には安本亀八が、1880 (M13) 年の第一回観古「美術」会の彫刻部門の判者として記されている。さらに安本亀八の弟子、平田郷陽の二代目は、父親と等身大人形製作に携わっていたが、1936年の帝国美術院展覧会に人形作品を出して入選を果たす<sup>18)</sup>。人形師の製作物が「芸術作品」となった。

人形師が望まなくても判者に抜擢される。望めば「作家」への道を選ぶことが可能だった。つまり人形師は日本においてそれだけの実力者だったということだろう。

1889 (M22) 年に東京美術学校での授業開始、1897 (M30) 年に日本美術院の創立。1907 (M40) 年には文部省美術院展覧会が始まり、徐々に日本人に「美術」の語彙が浸透してくる。

そんな折り、見世物では1905 (M38) 年に「大菊花美術菊細工人形」と宣伝する。数年の間、「美術楼閣」とか、「美術の妙技神に迫る」など、「美術」が人を引く文言になる<sup>19)</sup>。

一部の人形師は医学や美術の分野に少なからず貢献した。しかし条例などで打撃を蒙った見世物とはいうと、人形師の製作にも制限があり、「美術」という語彙をいち早く取り入れてはいるものの、逆に「美術」に依存しなければ人を呼べなくなっているとも考えられよう。

### 2-4. 商業の近代化 — 「百貨店」

1896 (M29) 年、高島屋京都店にショーウィンドーが設けられる。大手の呉服店は明治に入ると、新しい販売様式を取り入れるが、その一つが欧米様式の陳列販売の導入である。それまでは「座売り」が一般的であった。三井呉服店が1895 (M28) 年に東京本店の二階に陳列販売方式を導入したのをはじめ、大手の呉服店があいついで取り入れた<sup>20)</sup>。百貨店に変貌する呉服店はそれまでの木造店舗から、欧米の百貨店を模倣した「近代建築」へと姿を変える。

百貨店では欧米式のショーウィンドーに等身大人形を飾る。人形師の製作だった。東京では安本亀八らが担当し、大阪では「津の国屋」が最初に手がけ、他の人形師たちも後に続いた<sup>20</sup>。

それだけではない。百貨店では年に何回も展覧会を催した。

…百貨店は社会教育に多大の貢献をしている、例えば防空展、軍縮展、海軍展等、国民全般の頭に至急に行き渡らせる必要のある知識の普及は、百貨店に於ける展覧会に及ぶものは無い…<sup>21</sup>。

「国民全般の頭に至急に行き渡らせる必要のある知識」は、等身大人形を利用することによって「普及」した。こう解釈することができる。百貨店で行われた展覧会のすべてに等身大人形が用いられたわけでないが、多く活用されたことは事実である。

### 2-5. 「うしろめたさ」

日本は近代国家をめざし、建築、思想、文化、商業などあらゆる分野で「前近代」的なものを排除しようとしてきた。その中であって、「見世物」はたとえその内容が近代化に役立ったとしてもその「場」が「前近代」から存在したために排除の対象となる。

「衛生」国家をつくるため、「仮設」の建物は「不衛生」であるという判断が下され禁じられた。本当に衛生的であるか否かというよりはむしろ「欧米人」の目を意識したものであった。

「裸体」、「性描写」、「ニセモノ」、「相撲や蛇遣い」、「不具者」の見世物は「醜いもの」であるとし、処罰の対象となった。見世物は人間行為の善悪のメドを視聴覚的に教える場であるという慣習は否定された。条例自体が「西洋風俗を文明開化のシンボルとする新しい価値観」でつくられ、「外国人に対して国辱的と意識」すると当局者が「判断」して排除した<sup>22</sup>。

「見世物」は前近代の遺物である。すなわち「不衛生」であり、「醜い」ものであり、「時代遅れ」のものであるという烙印が押されることになる。ここに「見世物」に対する「うしろめたさ」のイメージが登場する。したがって活動写真は、「見世物」という名をつけて興行するわけにはいかなかったのだ。「活動写真館」という欧米伝来を示す語彙が必要であった。

しかし、新しい情報や知識を伝えることのできる見世物業界には「近代化」に貢献できる製作技術をもった「人形師」がいた。欧米の医学を学ぶときも、「衛生思想」の普及を試みる時も、新たに誕生した「美術」をつくりあげるにも、欧米式のディスプレイにもすべて人形師の活躍があった。「見世物」に展示すれば処罰は免れないようなものでも、欧米人に認められると「当局」が思えば製作は可能だった。また人形師が「見世物」という文言さえなければ、欧米人の評価を得ると判断される「作品」を作りあげる技術があったということもできる。

### 3. その後の等身大人形

「見世物」という語彙は、現在「珍しい物・曲芸・奇術などを見せる興行」とだけ理解され

ている。江戸時代にもっていた、新しい情報や知識、宗教的事例を供する「場」としての側面は消し去られた。しかし、人形師の活躍の場が消えてしまったわけではない。

かつての「見世物」の役割は「見世物」と呼ばれないところで、依然として等身大人形製作に息づいている。本章ではその後の等身大人形について記述する。

### 3-1. 人形師の製作した「仏像」

1871 (M4) 年に松本喜三郎が「西国三十三所観音霊験記」を見世物にした。喜三郎一世一代の傑作であり、大阪・名古屋・東京、故郷の熊本で興行される。このうち、谷汲観音像は現代でも熊本市の寺に安置されている。「聖観音像」も熊本市の別の寺に安置されている。宗教的事例を供する場であった「見世物」の製作者の「作品」が実際の寺に安置される。喜三郎は1891 (M24) 年に没するが、1950年に熊本県教育委員会より「近代文化功労者」として表彰される。

津の国屋大江作の人形が奉納細工に用いられたことはすでに述べたが、現代でも人形師によって手がけられている。大阪横堀町の「せとものまつり」には「せともの人形」が奉納される。愛知県瀬戸市でも、1932年に瀬戸物祭りが始まり、それ以降奉納細工として「せともの人形」が作られるが、いずれも人形師が製作に関与している<sup>24)</sup>。

### 3-2. 人体模型と医学的装具

松本喜三郎が製作した人体模型は、以後日本の解剖模型の手本になった。後に東大医学部から郷里の熊本医大に移され、記念品として納められた。第二次世界大戦中に焼失してしまいはしたが人形師の作品が「欧米の医学」を学ぼうとする医学生生の「教科書」になったのである。

百貨店や博覧会などの等身大人形を製作していた三代目安本亀八は、少年の左耳を作った。東京中の病院や整形外科ではすべて失敗に終わっていた。安本亀八は少年の祖父に「此の子の生れる時持って来た右の耳と、寸分も違って居りません」と言わしめた。その後安本亀八は政府からの依頼で、宮内省や日本赤十字社などにも人形を納品したという<sup>25)</sup>。

衛生国家を築くため、啓蒙活動の一環として博覧会や衛生博覧会が行われてきた。衛生博覧会は田中聡によれば、1959年まで行われていたという。それ以降「衛生博覧会」という名を冠した催しは見られない。しかし、現代でも類似した展示館を見ることができる。「秘宝館」である。これは「性」の部分を中心に展示である。衛生博覧会の展示品となった等身大人形が、すべてここにあるといってもよいであろう<sup>26)</sup>。

### 3-3. 百貨店のディスプレイ

安本亀八や「津の国屋」万兵衛の作った百貨店のディスプレイに利用される人形は、一体が手作りであったために、非常に時間とお金がかかった。そのコストを削減するために、生身の女性が人形の代用となる奇妙な現象が起こった。百貨店に飾られる人形を「陳列人形」と

呼び、生身の女性たちは「マネキンガール」と呼ばれた。「マネキン」という語彙は人形を意味するのだが、日本では人形の真似をする人間の方が、「マネキンガール」と呼ばれた。

人形の代用としてのマネキンガールたちは「代用品」としてばかりではなく、後のファッションモデルやハウスマヌカンのような役割まで果たすようになり、世間で認められていく。それによって、「マネキン」という語が人形を意味するという理解も得られ、彼女たちは「ファッションモデル」とか「ハウスマヌカン」といったようにそれぞれの職業に分かれていった。

マネキンと呼ばれるようになった「陳列人形」はその後、日本のそれまでの「人形製作」にヒントを得て、現代ではFRPという製法により、大量に製作することが可能となり、低価格となって普及した<sup>27)</sup>。ファッション産業を視覚的にリードする「マネキン」はその日本における起源が人形師の製作によるものであった。

### 3-4. ニュースの提供

1894 (M27) 年に日清戦争が起こる。その状況は新聞やパノラマ館で見るしかない。そこで、菊人形も戦況を立体的に伝える役に加わった。この年の7月に起こった「豊島の海戦」、同じく7月に部落からの猛攻撃を受けて亡くなった「松崎大尉の討死」などが菊人形の場面となる。日清戦争において日本は10月から鴨緑江の九連城を占領する計画をたてるが、10月の菊人形展ですでに刻々と変化する「九連城占領の実況」の場面を作った<sup>28)</sup>。

1904 (M37) 年の日露戦争のときも、1914 (T3) 年の第一次世界大戦も、1923 (T12) 年に起こった関東大震災も菊人形で再現された<sup>29)</sup>。1932年の上海事変、1937年の蘆溝橋事件、やがて第二次世界大戦と、日本は戦争のまったただ中であつた。1905 (M38) 年には絵はがきの販売、1928年にはラジオ放送、1930年にはニュース映画の上映が始まる。この頃になると新聞に加え、ニュース映画やラジオによって戦況を知ることができるようになっていた。それでも菊人形などの等身大人形は、戦地の状況を人形で表し、それが人を集めたのである<sup>30)</sup>。

菊人形は、「国技館」や「黄花園」、「枚方遊園」などの常設館で披露された。直接「見世物」という名を付けてはいない。しかし人形師は「見世物」時代からの人たちであつた。

しかし1953年にテレビ放映が始まると、さすがに情報を伝達する役割は果たさなくなった。

### 3-5. 博物館の教育的ディスプレイ

「見世物」にはかつて「醜態」を見せることによって善悪のメドをつけさせるという教育的効果があつた。既述の衛生博覧会や秘宝館がそうである。秘宝館は現代でも存在する。

医学や科学などの最新の知識を普及させるという役割は、現代でも等身大人形に残っている。人形師の製作した等身大人形が、博物館や展覧会の趣旨をわかりやすくするために役立っているのである。また矛盾したことだが、現代ではかつての「生人形」が博物館に「展示」されていることがある。「生人形」も歴史を構成する一要素というわけだ。

ということは、つまりガラスケースの中に「飾られた」等身大人形と、歴史をわかりやすく説明するために「外に並べられた」等身大人形の両方が存在するということになる。

「生人形」という呼称が一時代で消えたために起こった現象である。ガラスケースの外であっても内であってもそれらは人形師によって作られている。

### 3-6. 芸術家・作家としての人形師

二代目平田郷陽が人形を「芸術作品」として製作したことはすでに記した。彼は1955年に人形界最初の重要無形文化財になった。現代、郷陽は「人形師」ではなく「写実を重んじる衣装人形を得意」とする「作家」と呼ばれ、作る人形が「人形芸術」であると言われている<sup>31)</sup>。

本人の思惑を離れて、現代の人々がある人形師を「作家」と呼ぶ。九代目玉屋庄兵衛である。初代は17世紀にからくり人形を作る「人形師」であった。六代目は菊人形や細工物も手がけた。しかし現在九代目は「人形作家」と呼ばれ、全国各地の百貨店で「作品展」が行われる<sup>32)</sup>。

### 3-7. 娯楽の場として

「見世物」が娯楽を第一義とするのは言うまでもない。「見世物」という名はないものの現代でも人形師は多くの娯楽の場に貢献している。たとえば、本稿で取りあげてきた「菊人形展」がそうである。これは人形師と「菊師」という職人たちがいて初めて成り立つ娯楽である。また、時代村やアミューズメントパークなどの人形や造形を人形師が作っていることもある。中にはイベント企画会社として活躍している所すら存在する<sup>33)</sup>。

## おわりに

本稿は、等身大人形の製作者である「人形師」が何を作ったのかに着目し、それらが展示された「見世物」という「場」がかつてどのような役割を果たしていたのかを記した。また、現代の人々が「見世物」にもつ「うしろめたさ」のイメージがどのように植え付けられたのかについて日本における「近代化」の過程で明らかにしようと試みた。

等身大人形は医学・科学・三面記事・ゴシップなどの新しい情報や知識を伝える場〈見世物〉に利用された。人形師は実に様々なものを製作していた。現代では医学は医学者が、科学は科学者が、三面記事なら記者がその分野の情報や知識を伝える。しかしそれらが独立した分野として確立する以前、「見世物」が分野の別なくそれらの役割を担っていた。

これは現代の「珍しい物・曲芸・奇術などを見せる興行」という「見世物」の定義からは洩れている事実である。

一方で日本は近代国家をめざし、建築、思想、文化、商業などあらゆる分野でそれまでの「前近代」的なものを排除しようとした。その中であって、「見世物」はたとえその内容が近代化に役立ったとしても、その「場」が「前近代」から存在したために排除の対象となった。

「見世物」が前近代の遺物であるということは、すなわち「不衛生」であり、「醜い」ものであり、「時代遅れ」であるという烙印が押されることになる。ここに「見世物」に対する「うるめたさ」のイメージが植え付けられる。

しかし、新しい情報や知識を伝えていた見世物業界には、「近代化」に貢献できる製作技術をもつ「人形師」がいた。建築、思想、文化、商業などの分野で人形師が活躍した。

かつて、新しい情報や知識を伝える場〈見世物〉で製作技術を培った人形師たちは、現代でも、菊人形展や、博物館といった、「見世物」を冠しない様々な分野で活躍している。

本稿では限られた領域内ではなく、人形師が作った「等身大人形」という「モノ」に着目することによって、江戸時代から現代という時代の様子を異なった角度から解釈することができたのではないかと考えている。

今後調査を続行する予定である。特に海外の状況との比較は重要であると考えている。本稿でとりあげた18世紀後半に登場した「胎内十月」の造形は、同じ頃、フランスやイギリスでも「蠟人形の人体模型」として展示されたという事実があるからである<sup>30</sup>。また、日本では百貨店の等身大人形を人形師が製作したが、欧米の百貨店では蠟人形が飾られている。日本における等身大人形と同じような経緯を欧米の「蠟人形」がたどっている可能性すらある。調査の結果によっては日本だけにとどまらず、一時代の傾向と見ることもできるかもしれない。

\*筆者は1998年11月7日に行われた意匠学会第40回大会（於京都芸術短期大学）において「つくり手からみた「近代」——等身大人形の役割——」と題した口頭発表を行った。本稿はその際の意見等をふまえて加筆修正したものである。

## 注

本稿でとりあげる見世物のうち、本文で特に記載がないものは以下の文献を参考にしている。

朝倉無聲『見世物研究』春陽堂1928、復刻思文閣出版1977／古河三樹『図説庶民芸能—江戸の見世物』雄山閣出版1982。特に松本喜三郎と安本亀八については、上記二文献の他に以下の文献を参考にしている。土居郁雄『活人形と芸能』『夜想31』ペヨトル書房1993／土居郁雄「活人形師・その光芒」「ひとがた・カラクリ・ロボット展」図録〇美術館1996／大木透『名匠松本喜三郎』昭文堂書店1961／冨森盛一『生人形師 安本亀八』赤目出版会1976

1) 『新装版解体新書』講談社学術文庫1998／小川鼎三『医学の歴史』中公新書1964

2) 田野辺富蔵『医者見立て英泉『枕文庫』』河出書房新社1996

3) 三宅吉之助「瀬戸物町の造り物」『上方』第七号1931年7月／竹田政廣『なにわの陶業史』大阪府陶磁器商業協同組合1982

4) 瀬戸物細工神儒仏番付1856（安政3）年刊山城屋新六版

5) 斎藤月岑『増訂武江年表2』平凡社東洋文庫1968

6) 『長崎オランダ商館の日記』第三輯村上直次郎訳岩波書店1958／杉本つとむ『解体新書の時代』早稲

- 田大学出版社1997／武智秀夫・明石謙『装具』第三版医学書院1996
- 7) 本多進次「写真史年表」小沢健志『幕末・明治の写真』ちくま学芸文庫1997
  - 8) 小野芳朗『〈清潔〉の近代』講談社選書メチエ1997／『警視庁史明治編』警視庁史編さん委員会1959
  - 9) 前掲『増訂武江年表2』
  - 10) 『大阪朝日新聞』明治19年10月13日
  - 11) 石井研堂『明治事物起原』ちくま学芸文庫6 筑摩書房1997／寺下勅『博覧会強記』エキスプラン1987
  - 12) 井上章一「文明と裸体 日本人はだかのつきあい第八回路上の裸」『月刊 Asahi』1992年8月号
  - 13) 小木新造「解説（一）」『風俗 性』日本近代思想体系23岩波書店1990
  - 14) 古河三樹『図説庶民芸能——江戸の見世物』雄山閣出版1982
  - 15) 前掲『〈清潔〉の近代』／荒俣宏『衛生博覧会を求めて』ぶんか社1997／田中聡『衛生展覧会の欲望』青弓社1994
  - 16) 前掲『明治事物起原』ちくま学芸文庫3／前掲『博覧会強記』
  - 17) 土居郁雄「活人形師・その光芒」「ひとがた・カラクリ・ロボット展」図録○美術館1996
  - 18) 平田郷陽『人形芸五十年』講談社1976
  - 19) 『岐阜日々新聞』明治38年10月31日／『新愛知新聞』明治41年10月15日・明治42年10月16日など
  - 20) 『株式会社三越八十五年の記録』1990／仲田定之助『明治商売往来』青蛙房1974
  - 21) 『白木屋三百年史』1957／人形師重松良平氏からの聞き取り1998年11月21日
  - 22) 百貨店事業研究会編『百貨店の実相』東洋経済新報社1935
  - 23) 前掲小木新造「解説（一）」
  - 24) 抽稿「「せともの人形」の成立と展開」『かたち・あそび』（日本人形玩具学会誌Vol. 10）1999
  - 25) 鴻之助太夫「技神に入る人形師」『キング』1925年11月号
  - 26) 一例として「元祖国際秘宝館伊勢館」を挙げる。1972年に開館した。展示物には実物大の「胎内十月」がある。解剖される人形もある。性病患者の患部の拡大模型もある。警察主催の衛生博覧会のように、強姦シーンや性交シーンもあった。1993年8月31日調査
  - 27) 抽稿「服飾を支える肢体——第二次世界大戦までの日本における「マネキン」について——」『風俗』（日本風俗史学会会誌）第35巻第3号1996
  - 28) 『毎日新聞』1894年10月3日／『都新聞』1894年9月16日／『読売新聞』1894年10月24日など。
  - 29) 『新愛知新聞』1904年10月25日、1905年10月24日／『東京日日新聞』1914年10月10日／『岐阜日日新聞』1914年10月30日／『函館日日新聞』1923年11月21日など。
  - 30) 『毎日新聞』1937年9月25日／『読売新聞』1938年10月1日、1939年10月8日、1942年10月3日／『豊州新報』1940年10月1日など
  - 31) 前掲『人形芸五十年』／『人形芸術の世界展』図録日本経済新聞社1995
  - 32) 千田靖子『からくり人形師玉屋庄兵衛伝』中日出版社1998／『歴代玉屋庄兵衛からくり人形の世界展』図録NHKきんきメディアプラン1997
  - 33) 重松人形製作所、美尚堂工房など
  - 34) DENOUE, A Brief Description of those Curious and Excellent figures of the Human Anatomy in Wax, with Several other real preparation. 1790